

アスラ王国での
クーデター鎮圧

処刑場ではアリエル
一派の手勢は処刑され
死体が晒された…

しかし…

そこに
シルフィエットと
アリエルの姿は
なかった…

僕たちが…

アスラ王国
地下牢最奥

でも…

彼らがそれを
許さなかった…

捕らわれた僕たちは
処刑されるはずだった…

「体は貧相だが
締りがよいでは
ないか!!」

「こちらは良い
体をしている」

「さすがは王女様」

「おつと…
反逆者の
首謀者でしたな」

女だったから…



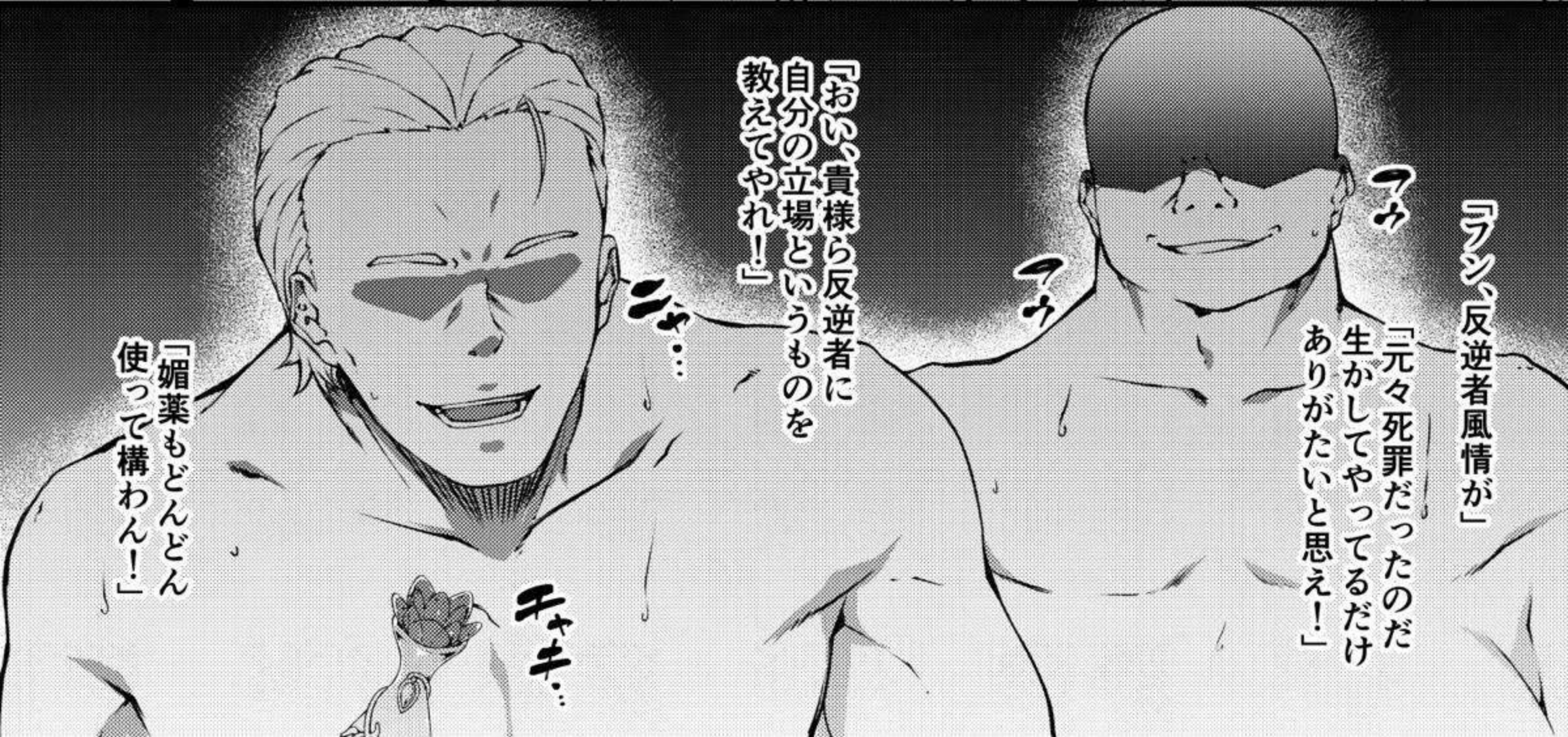
犯しそして
孕ませる事のできる

貴族たちにとつての雌奴隷

それが…今の
僕たちだった…

おねがい…
アリエル様を休ませて
あげて…

僕が…変わりに
やるから…



「ラン、反逆者風情が」

「元々死罪だったのだ
生かしてやってるだけ
ありがたいと思え！」

「おい、貴様ら反逆者に
自分の立場というものを
教えてやれ！」

「媚薬もどんどん
使って構わん！」

「あああッ!!」

「痛いッ……!!
もっ……ゆっくり……ッ!!」

「勢いつけねえと
テメエの子袋に
入らねえだろ!!」

「まだ俺のチンコで
こじ開けてやるよ!!」

「び……っぐうッ」

「そんな……ッ」

「ああああ……ッ!!」

媚薬で下がってる
子宮目掛けて
叩きつけてくるっ!!

「オラアッ!!」

まるで杭が
衝突してくる
みたいな衝撃——

「つぎゅうう……ッ!!」

子宮口がこじ開けられ
中で炸裂音が響く

また出されてる!!

ルデイ以外の
子種が
僕の膣内にいつ!!

「ああああああ……ッ!!」

「それよりも
アリエル様が
生娘だったことに
驚きでした」

「もつと遊んでるかと
思っただけですがねえ」

「うあ……
もう……やめ……」

「許可さえいただける
のでしたら」

「このまま純潔出産
というのも
悪くないです——」

「なッ!!」

「おかげで
何度純潔を
散らせても」

「この通り
治療魔術で……」

「ビビビッ!!」

「はっはっは！
よからう」

「早速孕ませる
準備だ!!」

「早速アスラ王国中の
貴族を集めてこい」



「遠慮することはないぞ」

「口、体、子袋、好きな場所に吐き出すがよい」

「孕ませた者には褒賞を与えてやるわけではないか」

「まぐさ」



「もっとも、誰が孕ませたかなぞ」「分かるはずもないがな」

「クククク」

「ハッハッハッ」

「貴様には城中の兵士の子種をくれてやろう」

「いや！やめてよおつ!!」

「ビビビッ
どいつのガキが出来るか
楽しみではないか」

「瓶に仕込んである風魔法でどんどん流れて行くぞ」

赤ちゃんの部屋を無理矢理こじ開けて流れ込んでくる…っ!!

「うあああ
あああつ!!」

絶え間なく注がれる子種が

無抵抗の子宮に突き刺さっていく

子宮に入ってきてる…!!

どんなに抗っても

「女」の子宮はそれを拒むことはできない



「受精」という
女の宮の陥落が
体の奥底で訪れていた――

アリエル様が
壊れてしまった…

「胎ん中にガキがいるって
分かると、余計に
興奮してくるぜ」

「まったくだ
一体誰のガキを…っ
孕んだんだろうなあ…っ！」

「出るッ!!」

「うげ…子袋が
飛び出てるじゃねえか」

「どうせ後で
治療魔術が
掛けられるだろ」

クーデターの失敗で
多くの人を殺され

さらに媚薬で体を
狂わされながら
犯され続けても

アリエル様は
なお耐え続けた――

――でも
身籠ったという事実は

アリエル様の心を
完全に壊して
しまった…

だらしなく飛び出た
子宮口からは
今吐き出されたばかりの
子種を吐き出し続け

何百回と散らされた
純潔の名残を
白く上書きしていった

アリエル・アネモイ・アスラ…
彼女の瞳に光りが戻ることは
もう…訪れない――

そして僕は――

「三カ月間犯し続けて
まだ孕んだ様子はないか」

「たしかこいつは
無詠唱魔術の使い手」

「何らかの
魔術を使って
孕まないように
してるんだろうぜ」

そう：僕はまだ：
孕んでない：

あらかじめ
子宮の中に
水魔術を展開して

子種が胎に届く前に
死滅させていたから：

ルディの…
子供以外
孕むもんか…
これだけは…
命に代えても…

「まあ、上も
この女に飽きて
きたから」

「最後の見世物として
アレを使って
処理しろ」とさ

「アレか…素直に
孕んでおけば
いいものを…」

なにかが…
聞こえる…

何かが…
いる…？